

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） イリス・ハウカンブ

学位申請者 Chris H. Park

論文名 Third World Connections: Transpacific Imaginaries, Postcolonial Critiques, and
Diaspora Politics in Global Capitalism

【審査結果】

審査委員会はイリス・ハウカンブ（主査）、友常勉（主任指導教員）、上原こずえ、マニユエル・ヤン（日本女子大学）、スージー・キム（ラトガース大学）から構成された。事前審査は2025年3月4日にオンラインで実施され、最終試験は、2025年7月28日にハイブリッド形式で13時から約3時間かけて、本部講義棟大会議室において実施された。質疑応答におけるChris H. Park氏の受け答えは終始誠実かつ真摯なものであった。以上の論文審査と口述による最終試験（公開審査）の結果、審査委員会は、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、1930年代から1970年代にかけて、日本および北米において活動した朝鮮人ラディカルたちによって創出された環太平洋的想像力（トランスパシフィック・イマジナリー）を検討するものである。とりわけ、自由主義的な民主主義や資本主義的發展を含む国家の近代化政策に対抗しながら、コリアン・ディアスポラがいかなる政治的想像力と主体性（エージェンシー）を形成したのかに焦点をあてるものである。

20世紀の転換期において、朝鮮人移民労働者は故郷を離れて各地へ拡散し、日本や北米における資本主義社会の中核を構成する存在となった。彼ら・彼女らが環太平洋空間を移動するなかで、ディアスポラの朝鮮人移民労働者、学生、亡命者たちは、社会的・経済的制約を克服するために、社会運動を構成していたマイノリティたちと接触した。人数としては少数であったものの、こうした初期ディアスポラの経験と軌跡は、コリアン・ディアスポラの想像力を形成する契機を提供した。

それらの想像力は、帝国主義的植民地主義への反動として出現した自由主義的ナショナリズムの理念に異議を唱えるものであった。同時に、プロレタリアートや労働者階級の大量移動を引き起こし、彼ら・彼女らをグローバル労働市場へと組み込んだ資本主義的近代のメインストリームにも対抗するものであった。ホスト社会における規範的な生活様式や、「祖国」を解放するという物語に距離を取り、あるいはそれを拒否することによって、人種、エスニシティ、社会階級、さらには資本主義的近代そのものを超越する「トランス・パシフィック」な連関が立ち現れたのである。

社会運動研究の多くは、社会的動員の特質を記述し、均質的な社会運動アイデンティティをその中核的な強さの一つとみなしてきた。しかし本研究は、近代化や開発主義的資本主義に対抗する動員のなかで生成したディアスポラの想像力の最も本質的な特質を、多様な経験、声、そしてホスト社会や他のマイノリティと交渉し連帯する回路のうちに見出そうとするものである。

【論文の構成】

Part I: A background history of labor migration, exile, and displacement

Introduction

Chapter 2: Koreans in the “New World”: settler colonialism, sugar capitalism, and plantation labor

Chapter 3: Korean labor migration and Japanese colonial modernity

Part II: Contesting postcolonial order: anti-Korean War mobilization from California to Osaka

Chapter 4: Radical politics in Korean America: transracial solidarity and anticolonial imaginative, 1929–1945

Chapter 5: Making postwar cultural autonomy and subjectivity

Chapter 6: Mobilizing against racialized war: antiwar movement, 1950–1953

Chapter 7: Can bombs bring peace? antiwar and subversive action in the 1950s

Part III: Trans-Pacific imaginaries/ formulating “Third Worldism” as method

Chapter 8: Envisioning Third World autonomy

Chapter 9: Countercultural alternative to American Cold War modernity and the postcolonial democracy

Chapter 10: Articulating Third World space: neocolonial dependency, alienation, and high-growth fetishism

Conclusion

Bibliography

【審査の概要及び評価】

CHRIS H. PARK 氏の研究は、1930年代から1970年代までのラディカルなコリアン・ディアスポラの活動に焦点をあて、日本、朝鮮半島、北米にまたがる環太平洋における彼ら・彼女らのディアスポラ性とアイデンティティの形成をたどりつつ、反植民地主義と近代化の圧力と交渉、あるいは抗争しながら、社会運動を通じたその解放戦略の系譜を、「第三世界的想像力」として把握しなおすものである。1930年代から70年代までの太平洋をはさんだ韓国、日本、北米をまたにかけた社会主義者や労働運動、アナーキズムの連帯の先駆者たちについては、すでに歴史研究があり、かならずしも目新しいものではないが、本研究は、こうした歴史

的系譜をコリアン・ディアスポラという存在のあり方にフォーカスし、さらにそれを「第三世界的想像力」で結んだことに新しさがある。

その構成は、日本の植民地主義と韓国併合に規定されたコリアン・ディアスポラの通史的な叙述を踏まえて、20世紀初頭のハワイのプランテーション労働や北米のコリアン移民を対象に、KOREAN NATIONAL ASSOCIATION (KNA)やコリアン移民女性たちの運動に焦点をあてた第一部を踏まえて、第二部では、1931年にシカゴで組織されたコリアン左翼の KOREAN ACADEMY OF SOCIAL SCIENCE による、SCOTTSBORO NINE BOYS 裁判におけるアフリカン・アメリカンとの連帯運動にみられる、ラディカルなコリアンによる反人種主義・反植民地主義の国際連帯運動の社会運動史における意義、1945年の日本帝国主義の終焉と解放後の日本におけるコリアンおよびコリアン・コミュニティに焦点をあて、在日朝鮮人連盟の結成とその解散後に組織された在日朝鮮民主統一戦線の活動を軸に、朝鮮半島の分断や朝鮮戦争のもとでの民族解放闘争が叙述される。

そして第三部では、小田実や武藤一羊などベ平連グループが中心となって日本で組織された1974年の「アジア人民会議」を中心に、冷戦と「新植民地主義」の台頭、復活した戦後日本資本主義による開発主義と公害輸出、三里塚闘争や寄せ場の運動、沖縄、部落などの日本国内の運動との連携のなかで形成された「第三世界主義」の潮流を支えたコリアン・ラディカルの思想と実践が叙述される。さらに朴鐘碩の日立就職差別闘争などの労働運動における連帯や、コリアンの女性グループによる反公害運動の成果も含まれ、開発主義と消費を礼賛する高度経済成長の物語に対する批判的思考や言説がどのように形成されたかについても目配りされている。

以上のように、CHRIS H. PARK 氏の本研究は、コリアン・ディアスポラ・ラディカルたちの環太平洋的な活動の連関を、その地政学的差異と共通性に目配りしながら、20世紀前半から後半まで見渡して叙述するという挑戦的な試みである。そしてそのラディカリズムの思想形成を「第三世界主義」という観点を試金石として、近代化、開発主義、反人種主義の国際連帯、物神性批判などの論点からアプローチすることで、批判的アジア研究とカルチュラル・スタディーズを結合した優れたプロジェクトだといえよう。

ただしその野心的なプロジェクトであることにともなって、ハワイ・北米の朝鮮人移民研究や、解放後の在日朝鮮人運動史については、従来研究のサーヴェイが中心となっている部分も見受けられる。参照しているリソースも主としてラディカルの言説分析に依拠しているため、人口動態などのセンサス資料の検討は十分とはいえ、またコリアン・ラディカルを中心とした記述からは、多様な政治イデオロギーを有したコリアン・コミュニティの人々の生活実態や言説が必ずしも十分に分析の対象となっていない。韓国教会とラディカルな活動との関係には目配りされているものの、左翼知識人や活動家を支えているコミュニティとの関係の考察は限定的である。また、雑誌 AMPO を用いた「アジア人民会議」などの分析を学位論文の対象としたことは先駆的だといえるが、新左翼運動とコリアン・ラディカルとの関係については、さらに分析的に検討される余地があるだろう。さらに国境を越えた連帯ということでは、1989年の韓国スミダ争議のように、日本と韓国の労働運動が連帯して成果を上げた事例も参照されると、議論は一層厚みを増したのではないと思われる。また朝鮮戦争時における、朝鮮民主

主義人民共和国の役割に関わって、コリアン・ディアスポラ内部の朝鮮籍の女性たちの反戦運動についても、関連する文脈として位置付けられる可能性があるだろう。加えて、予備審査および本審査では、形式面での配慮が研究上の課題でもあることも指摘された。

もっとも、こうした点を踏まえても、本研究が批判的アジア研究とコリアン・ディアスポラの社会運動研究についての優れた成果であることは疑いない。

以上、いくつかの課題は残しているものの、その独創的な挑戦、先行研究を乗り越える調査と達成、そして学位請求論文としての完成度をふまえて、Chris H. Park 氏の博士（学術）の学位授与は妥当であると審査員全員は一致して認めるものである。